



日本植物分類学会

ニュースレター

No. 20

Feb. 2006

目 次

諸報告.....	2
第5回日本植物分類学会賞受賞者の決定.....	2
2005年度第1回メール評議員会議事抄録.....	2
第17回国際植物学会議命名法部会.....	3
庶務報告(2005年11~2005年1月).....	9
商業目的の転載許可願への対応手続きについて(訂正).....	9
日本植物分類学会講演会の報告.....	10
植物分類学会講演会に参加して.....	10
講演会の感想.....	11
環境省レッドデータブック・植物I(維管束植物)の見直し調査の進行状況と中間報告.....	11
お知らせ.....	13
日本植物分類学会第5回大会シンポジウムのお知らせ.....	13
2006年度総会における審議事項.....	13
評議員会の開催.....	13
2005年度事業報告(案).....	14
2005年度決算報告(案).....	15
2006年度事業計画(案).....	16
2006年度予算(案).....	17
金沢大学理学部標本庫(KANA)再開のお知らせ.....	18
金沢大学植物多様性分野教員(助教授または講師)の公募.....	18
科学博物館植物研究部研究官の公募.....	19
本の紹介.....	20
書評:「中尾佐助著作集 第V巻 分類の発想」.....	20
「被子植物の起源と初期進化」.....	21
いきもの便り.....	22
コケの孢子体・その1.....	22
植物と動物便り・2・ヘクスノキのダニ室へ.....	23
会員消息.....	24

諸報告

第5回日本植物分類学会賞受賞者の決定

2005年度学会賞選考委員会委員長 加藤雅啓

第5回日本植物分類学会賞は、推薦があった7名の候補者について学会賞選考委員会において審議した結果、下記の2名が受賞者に決定しました。授賞理由は以下の通りです。

西田治文 氏(中央大学工学部教授)
中藤成実 氏(東京都東大和市在住)

西田治文氏は鉱石化石など質の高い化石標本を解析し、その成果を新(現生)生物学の知見と総合されて、シダ植物から被子植物に及ぶ多様な維管束植物の系統進化を解明してられました。絶滅裸子植物(キカデオイデア類, グロソプテリス類他)や被子植物(プロトモニミア科)の化石研究から、それまでの常識を覆し新規性の高い優れた研究を行ってられました。古植物学の立場から本学会の植物分類学の研究活動に多大な貢献をされたばかりか、学会の要職をこなして学会の発展に大きく貢献されたことが高く評価されました。

中藤成実氏は長らく高校教諭を勤められた後、現在は退職されてご住職を務めておられます。職歴に変化はあったものの一貫して高校および自宅を研究室として、日本産はいうに及ばず中国産、マリアナ諸島、北米など近隣地域あるいは関連地域産のシダ植物の細胞分類学的・細胞地理学的研究を手がけられ、優れた業績をあげてられました。また、2001年以降は毎年1篇のペースで学会誌(英文)上に論文を発表され、新学会の発展に大きく貢献されました。これらの活躍が高く評価されました。

2005年度第1回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 黒沢高秀

2005年12月23日～2006年1月10日に2005年度第1回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は会計決算案と予算案、事業報告案と事業計画案を評議員の方々に審議して頂き、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする、3月17日の評議員会と18日の総会に提案される議案には、その後の推移を考慮した最低限の修正が加えられている箇所がありますが、どうぞご了承下さい。

開催日時: 2005年12月23日～2006年1月10日17:00

開催方法: 電子メール等の媒体を用いた会議

参加者: 評議員全員

議長選出

議長として邑田仁氏が選出された。

審議事項

第1号議案 2005年度決算案

第2号議案 2005年度予算案

第3号議案 2005年度事業報告案・2006年度事業計画案

審議結果

第1〜3号議案は承認12, 非承認 0, 白票1で, 承認された。

議長を邑田仁氏とすることに反対はなかった。

議事録署名人として高宮正之氏と高橋英樹氏が選出された。

第17回国際植物学会議命名法部会

永益英敏(京都大学総合博物館)

2005年7月, 第17回国際植物学会議がウィーン(オーストリア)で開催された。ウィーンでは1905年にも第2回会議が行われているのでちょうど100年ぶりのことである。最近では6年に一度開かれるこの国際会議は, 植物命名法に関して大きな意味を持っている。国際植物命名規約の改正を行う機会でもあるからだ。本会議に先立って開催される命名法部会 Nomenclature Section で決まった改正案を本会議で承認することによって新しい命名規約が発効するのである。



スクリーン左には現行のセントルイス規約, 中央に修正案が表示されている。前に並んでいる4名の幹事は左から, Stuessy(記録係), McNeill(報告担当委員長), Nicholson(会長), Turland(報告担当副委員長)の各氏。

参加者の多い本会議(7月17-23日)の会場はウィーンの北東にあるドナウ川の中洲にあるUNO Centreだったが, 命名法部会(7月12-16日)はウィーン大学の大講義室(Uni-Campus Lecture Hall C1)で行われた。午後3時に終了した最終日を除いて, 毎日午前9時から午後6時まで規約の改正について活発な議論が交わされた。命名法部会は本会議に参加登録した人なら誰でも出席する権利がある。参加者

は198人。この参加者ひとりひとりに1票の個人票が与えられる。さらに研究機関ごとに1〜7票の機関票が与えられ, 今回行使したのは70機関(402票)である。それぞれの票数に応じて白(1票), 緑(2票), 黄(3票), 赤(5票)と色の異なるケント紙のカードが配られる。このカードは切りやすいようにミシン目を入れてあり, 1から31までの番号が打たれた投票用の紙片にちぎることができるようになっている。

前回のセントルイス会議以後に提案された規約改正案は取りまとめられ, Taxon誌上に発表されている(McNeill & Turland 2005)。今回は312件であった。この提案に対して国際植物分類学会(IAPT)会員により事前に予備的郵便投票(セントルイス規約III. 4)が行われている。その締め切りは2005年5月31日に予定されていたが, 郵便の遅れにより筆者の手元に投票用紙が届いたのは締め切り前日の5月30日であったため, 事務局に事情を説明して7月1日に締め切りを延期してもらうことができた。配付された予備的郵便投票の投票用紙1390のうち, 投票されたのは166票(11.9%)であるという。

今回の命名法部会の幹事は次のとおりである。D. H. Nicholson氏(会長, アメリカ合衆国), J. McNeill氏(報告担当委員長, スコットランド), N. J. Turland氏(報告担当副委員長, アメリカ合衆国), T. F. Stuessy氏(記録係, オーストリア)。

まず, 採決方法について次のように確認が行われた。1) 予備的郵便投票によって75%以上の反対があるものは会場で再提案がなされない限り審議しない, 2) 規約の修正に関わる提案は60%以上の賛成

をもって可決する、3)会場での動議については5人以上の賛同者がなければ受け付けない。これは横浜(第15回)でもセントルイス(第16回)でも採用されていた方法である。採決はまず挙手によって行われるが、賛否がほぼ同数の時はカード全体を掲げることでどちらがより多いかを確認する。それでも判然しないときは特定の番号の書かれたカードを切り取って投票する。



通常は挙手による採決だが、ほぼ同数の場合、機関票による重みを見るために4色のカードを見せる方法で採決が行われる。

学名の登録問題、保護名、生物命名規約(BioCode)など大問題を抱えていた前2回の会議にくらべて、今回は大きな改正点はなかったという印象を受けた。以下にいくつかの変更点および議論になった提案について簡単に紹介しておく。

多型的生活環をもつ菌類の学名

今回の重要な変更点の一つである。多型的生活環をもつ菌類の種の正名はテレオモルフであることを示す要素によってタイプ選定された最も古い合法名であり、アナモルフの学名は型分類群に対する学名としたことで、この生物群の学名は二重の学名を持つことになった。このことは学名の「インフレーション」を招き、近年の分子分類学の進歩によりテレオモルフが見つからなくてもかなりの確かさで系統的な所属がわかるようになると煩雑すぎるとして変更が求める声が大きくなっていった。Hawksworth (2005)の提案は、「2008年1月1日以後はすでに合法的な学名が別のモルフにある場合には、新たな学名の提案を非合法とする」という厳しいものであったが、この問題に関しては次の国際植物学会

議に向けて「多型的生活環をもつ菌類の命名法に関する特別委員会」を設置して検討することになった。ウィーン会議で可決されたのは次の部分だけである。

- 1) 59.7条を新しく加える「すでにアナモルフとして知られているが、そのホロモルフに対して使用できる学名がない菌類にテレオモルフが発見された場合、そのアナモルフの学名の初発表文にテレオモルフについて全く言及がなくてもテレオモルフ段階を示すエピタイプをそのアナモルフの学名に対して選定してよい。」
- 2) 59.4条を次のように改める「テレオモルフのタイプまたはエピタイプ(第59.7条)をもつ学名はアナモルフのタイプだけをもつ学名に対し、これらのタイプが同一のホロモルフ分類群に属すると判断されるときは先取権に関わりなく優先される。」
- 3) これに伴い59.1条と59.2条にエピタイプについて言及する。

すなわちアナモルフの学名に対してテレオモルフ段階のエピタイプを指定することでホロモルフの学名として使用できるようにし、新たな学名をつくることを避けるということである。

属より上位の学名の出発点

今回の重要な変更点の一つである。維管束植物(第13.1条(a))とミズゴケ科および苔類(第13.1条(c))について、属より上位の分類群の学名の出発点をJussier, *Genera Plantarum* (4 August 1789)とすることが決まった。Linnaeus (*Species plantarum*, 1753)はfamilyというランクを用いていない。現在広く用いられている科の名称はJussier (1789)以後のもので、もしLinnaeus (1753)を出発点とする現行の13.1条を厳密に適用すると多くの科の名称が異なってしまう(たとえばAdanson, *Familles des plantes vol. 2*, 1763)ことが指摘されていた。

ランク

補助ランクとしてsub-に加え、super-

を条文の中に明示しようという提案は否決された。

各ランク名称の標準的省略形が条文として明示されることになった。cl. (class), ord. (order), fam. (family), tr. (tribe), gen. (genus), sect. (section), ser. (series), sp. (species), var. (variety), f. (forma).

11.9条を下のように変更「優先権の原則は科より上位の分類群の学名には適用されない(ただし勧告16Bをみよ)。」現在は「...強制されない(...)」とあるのを明確に「適用されない」とする。

補助的なランクの学名の保存

セントルイス規約のもとでは保存できる学名のランクは科, 属, 種のみである。これを科内, 属内, 種内の補助的なランクでも保存できるようにしようという提案は賛成と反対が拮抗し, カードによる投票となった。まず種内分類群で賛成224:213 (51.3%)で否決, 次いで科内分類群で賛成220:反対210 (51.2%)で否決され, 属内分類群についての提案は提案者により取り下げられた。

異なる属に基づいた科の学名が同名となるとき

異なる属名に基づいているにも関わらずその単数属格の語幹が同形となるため, 結果的に科の名前が同名となるときは, 一方の科の名前を単数主格に-aceaeをつけて回避できるようになった。たとえばTrigoniumaceae (< *Trigonium* Cleve)とTrigoniaceae (< *Trigonia* Aubl.)。同名は回避できるとはいえ, 語としてはなんだか不細工だと思っるのは筆者だけだろうか?

電子出版

「電子出版に関する特別委員会」による, 電子出版を有効発表と見なすための条件を明示した提案はすべて予備的郵便投票で88%以上の反対を受けたが, 会議場では議論が沸騰した。これを受けて会場で電子出版に関心のある参加者を募って昼休みなどに電子出版の問題点に関

する小集会が行われた。かなりたくさん参加者がおり, この問題への関心の高さがうかがわれた。この集会での検討の結果, 新たな提案がなされた。今回は電子出版のみを有効発表とはしないことを確認した上で, 将来, 有効発表と見なされ得る場合を考慮した電子出版に関する新しい付記・勧告が提案され, こちらは可決された。また, 次回の国際植物会議に向けて「電子出版に関する特別委員会」を再度設置することも可決された。近年, 生物学のさまざまな学術出版が電子出版の形で行われるようになってきた。新学名の発表といえども近い将来に電子出版物を無視することはできなくなるであろうことは明らかである。学名の安定性を損なわない明確なガイドライン作りを期待したい。

学位論文が有効発表となるとき

前回の会議にも議論となったテーマであるが, 学位論文が有効発表となる場合についての提案が会場で修正された後, 可決された。第30条に次のような文言を加える。「大学もしくはその他の教育機関に学位を得る目的で提出されたと明言された定期的でない独立の著作で, 1953年1月1日以後になされた出版物は, その著者もしくは出版社によって有効発表と見なされているというはっきりした言明もしくは他の内的証拠を含んでいない限り, 有効に発表されていない。」また付記2として「ISBNもしくは出版社の名称があることは, その著作が有効発表であることを意図されていたという内的証拠とみなされる。」

判別文もしくは記載文とは

正式発表の要件となる判別文もしくは記載文とはどのようなものをさらに明確にするため, いくつかの修正案が提出された。このうち第32条に次の文言を加える提案が可決された。「第32.1条の目的において, 純粋に美的, 経済的, 医学的または調理などの使用に関する特性, 文化的特性, 栽培技術, 地理的由来, 地質学的年代は分類群の記載とみなすべきではない。」これにより *Musa basjoo* Siebold,

Verh. Bat. Genootsch. Kunsten 12: 18 (1830)の記述は正式発表の条件をみたしていない、と判断されることになる。この例は可決された提案に含まれ、実例として規約中に掲載される。

旅行記や日記のようなものに簡単な記載が含まれる場合も正式発表のための要件を満たしていないとする、という提案に関しては賛否が分かれ、カード投票になった。結果は賛成201: 反対254 (44.2%)で否決された。

タイプの名称

さまざまなタイプの重複品である、アイソタイプ、アイソレクトタイプ、アイソエピタイプなどやレクトタイプが選定された後のシンタイプの残りの名称などについて第9条に適切な位置に挿入して定義することが編集委員会にゆだねられた。

タイプが図解でもよいとき

セントルイス規約第37.4条によれば「新種あるいは新種内分類群(化石を除く: 第8.5条をみよ)のタイプは、それが標本として保存できない場合にのみ限り、1つの図解であっても構わない。」これを曖昧であるとして第37.4条を削除する提案がなされた。かなり長い議論の末、カード投票となり、賛成151: 反対300で否決された。しかしさらに修正動議が出され、第2案はカード投票で否決、第3案は取り下げ、そして第4案が可決された。その第4案とは第37.4条を次のように改めるものである。「37.4 本条の目的において、新種もしくは新種内分類群(化石を除く: 第8.5条をみよ)は1つの標本または2006年12月31日までは1つの図解でもよい。2007年1月1日以後はタイプは1つの標本でなければならない。」

さらに37条に次の文言を加える。「本条の目的において、微小藻類または微小菌類の新種または新種内分類群のタイプは、保存に技術的な問題があるか、意味のあるタイプまたは原資料の部分を保存することが不可能である場合には、1つ

の有効に発表された図解でもよい。」

新しい学名であることの明示

新しい学名のあとにnov. をつけて明示することは慣習的にはなされているが、命名規約に特別の取り決めがあるわけではない。これを正式発表の条件としようという提案がなされたが、条文ではなく次のような勧告として導入することが可決された。「新学名の後ろには"novum"またはその省略形を含む語(例 gen. nov., sp. nov., comb. nov.)を直ちに引用するべきである。」

自動名の成立に言及

自動名に関する新しい勧告26Bを挿入することになった。「自動名もまた成立させることになる種内分類群の学名を発表するときは、著者はこの自動名についても出版物の中で言及するべきである。」

属より上位の分類群の著者には括弧がつかない

49.1条に次の付記1を加える。「括弧をつけた著者の引用は属より上位の学名に対しては行ってはならない。なぜならばそのような学名は49.1条で定義されたような基礎異名を持たないからである(第33.3条もみよ)。」

著者の引用方法の変更

セントルイス規約46.5条によれば「1753年より後に学名の出発点を持つ群については、出発点より前の学名が、それを正式発表した最初の著者によってランクあるいは分類学的な位置が変更されているとき、その出発点より前の学名は"ex"という語の前に括弧に入れて付け加えてよい。」この一文および第46.5条実例22を削除し、従来の著者の特殊な引用方法は今後認めないことが決まった。これにより*Hydrocoleum glutinosum* (C. Agardh) ex Gomontのような著者引用はせず、*H. glutinosum* Gomontと引用されることになる。

種および種内分類群の形容語はすべて小文字で始める

勧告60F. 1. では「種および種内分類群のすべての形容語は小文字で書き始められるべきである。」とするが例外的に「しかし、形容語が人名(実在であれ伝説上であれ)、地方語名(または非ラテン語の名)または以前は属名であった名前に直接由来した場合は著者が大文字で書き始めたいならばそうしてもよい。」とされていた。しかし今回の改正により、この後半部は削除されることが決まった。

正字法(その他)

第60条を中心とする学名の正字法についてはRijckevorsel氏により142件もの大量の修正提案がなされた(Rijckevorsel 2003, 2004)。報告担当委員長のMcNeill氏(McNeill & Turland 2005)をしてRijckevorsel氏は正字法に関する節(規約第VII章 第1節 正字法)を全部書き直している(実物大模型mock-upを作っている)、と表現せしめたほどである。今回の会議では彼のために特別に時間をとって、その全体構想を聞くことになったのだが、変更点があまりにも膨大すぎるうえに話が抽象的で全体像が結局よくわからなかった。参加者もうんざりしてしまい、特別に分けて検討するべき部分以外はそのまま編集委員会に丸投げとなってしまった。ちょっとお気の毒である。

雑種の学名の表示

可決されたRijckevorsel氏の提案の一つ。雑種であることを示す記号である×およびその代替記号であるxを使用する場合に、セントルイス規約では勧告H. 3Aにより「乗法記号×はその学名または形容語の最初の文字の直前に」また「“x”を使うならば、“x”と形容語との間に1字分のスペースを残すことであいまいさを避ける助けとしてよい」とされている。しかし今回の改正では、どちらも読みやすいように適当に開ける、ようにH. 3Aを変更することになった。どちらもスペース1字分だけ開けるという修正動議が先に採決されたが、こちらはカード投票により賛成264: 反対210

(55.7%)により否決された。皆カーニングのできるワードプロセッサを使っている。タイプライターの時代じゃないんだから、というのがその理由だった。

用語集

命名規約中に用語集をつけることが承認された。セントルイス規約日本語版(大橋・永益 2003)にあるようなものになるのだろうか? 便利なような気もするが、「そもそも規約によって用語が定義されるのであるから必要ないのではないか」というもっともな反対意見もあった。

維管束植物委員会の設置

第III部で定められている常設命名法委員会のうち、(2)種子植物委員会と(3)シダ植物委員会とを合併して、維管束植物委員会Committee for Vascular Plantsとすることに決まった。理由はシダ植物委員会の委員のなり手がなからだそうである。英語の名称は他の委員会に合わせてCommittee for Tracheophyta となりそうだったのだが、インド人参加者から英語の方がずっといいという提案が出てVascular Plantsに決まった。

次回から機関票は申請しないともらえない

過去の経緯から各研究機関に1~7票が配分されている機関票だが、全面的に見直すことが決まった。次回からは国際植物学会議に先立って、それぞれの研究機関の活動状況を示す資料をつけて機関票を行使することを申し出ないと機関票は与えられなくなる。これにより規約のIII. 4(b) (2)が修正される。各研究機関の代表の方は注意していただきたい。

*Acacia*を保存名にすることで大議論

規約の個々の条文の改正に関する議事が終わった後、命名法部会では分類群ごとに設置された常設命名法委員会からこの6年間の活動の報告を受ける。保存名や同名などの審議結果について報告され、通常はなんの問題もなく賛成承認されるのだが、今回は違った。*Acacia* Mill. を別のタイプで

保存することが問題となったのである。*Acacia*は1300種以上もある大きな属だが、これが5つぐらいの属に分割されそうになったのがそもそもの発端である。もともとのタイプはエジプト・アラブに分布する*Acacia scorpioides* L. (= *A. nilotica* L.)で、狭義の*Acacia*は160種ほどがアメリカ、アフリカ、アジアにあり、オーストラリアに950種以上ある*Acacia*はそのほとんどが*Racosperma*という別の属名になってしまっていて、わずか7種が*Acacia*に残るだけとなる。これに反発したオーストラリアがタイプをオーストラリアの*A. penninervis* DC.にして学名の変更を避けようとして提案したものの、タイプの変更についてはそれなりの理由は述べられているのだが、なんとなく身勝手な印象は免れない。

種子植物委員会でも(9:6 [60%])でギリギリの通過。SecretaryのBrummitt氏がわざわざこの提案のためだけに特別に賛成の立場で報告を書く(Brummitt 2004)という異例の展開。全体委員会でも(14:6 [70%])で通過したといういわく付きの案件である。命名法部会のロビーにはオーストラリアから種子植物委員会宛に届いた保存決定への嘆願書メールがべたべたと山のように貼ってあり異様な雰囲気であった。

命名法部会ではいったんそれぞれの活動報告を承認した後、*Acacia*だけを承認しないという動議が出され審議に入った。Brummitt氏による20分にもわたる事情説明の後かなり議論も出たが、結局、今回最後のカード投票となり、非承認247:承認203 (54.9%)という結果になった。実はすでに全体として承認されているため、*Acacia*だけを削除するためには60%が必要だという理屈で*Acacia*は保存名として承認されることが決まった。なんだかだまされたような気もするが、参加者からは文句は出なかった。

最後に次の国際植物学会議に向けて報告担当委員長と各常設命名法委員会の委員の選出が行われた。次期の報告担当委



*Acacia*を保存名とする事に対する、今回最後のカード投票の集計の様子。

員長はMcNeill氏(スコットランド)が再任された。日本人では維管束植物委員会に大橋広好氏(東北大学)、藻類委員会に増田道夫氏(北海道大学)が再任、全体委員会に筆者が加わることになった。

今回の命名法部会に出席した日本人は筆者のみだった。行使された日本の機関票は国立科学博物館(5票)、東京大学(4票)、京都大学(2票)のみ。上に述べたように次回からはあらかじめ申し出ない限り機関票は自動的にはもらえなくなる。

今回も命名法部会の詳細な記録はEnglera誌上に掲載されることになっている。予備的郵便投票および採決結果の報告は昨年11月号のTaxon 54(4)誌上に掲載されている(McNeill et al. 2005)が、この11月号は本稿をほぼ書き終えた2月の初めになってようやく届いた。予備的郵便投票の用紙も届くのがずいぶん遅かった。送料節約のためとはいえ、あまりにも遅いのは問題である。

この報告はあくまでも速報であり、最終的な表現や条項についてはウィーン規約出版後に確認していただきたい。編集委員会の判断によって表現や順序が変更されることがあるからである。今回提案された変更案も結局編集委員会にゆだねるという結論になったものがかなりある。

今回は2011年、メルボルン(オーストラリア)で開催されることが決まっている。ウィーンよりはずっと近い。日本からより多くの参加者がいることを期待したい。

- Brummitt, R.K. 2004. Report of the Committee for Spermatophyta: 55. Proposal 1584 on *Acacia*. Taxon 53(3): 826-829.
- Hawksworth, D.L. 2005. (183-187) Limitation of dual nomenclature for pleomorphic fungi. Taxon 53(2): 596-598.
- McNeill, J. & N. Turland. 2005. Synopsis of proposals on Botanical Nomenclature - Vienna 2005. A review of the proposals concerning the International Code of Botanical Nomenclature submitted to the XVII International Botanical Congress. Taxon 54(1): 215-250.
- McNeill, J., T.F. Stuessy, N.J. Turland & E. Hörandl. 2005. XVII International Botanical Congress: preliminary mail vote and report of Congress action on nomenclature proposals. Taxon 54(4): 1057-1064.
- 大橋広好・永益英敏(編). 2003. 国際植物命名規約(セントルイス規約)2000, 日本語版. 日本植物分類学会, つくば.
- Rijckevorsel, P. van. 2003. (005-055) Orthography and its standardization. Taxon 52(2): 377-384.
- Rijckevorsel, P. van. 2004. (089-179) Orthography and its standardization - II. Taxon 53(2): 577-591.

庶務報告(2005年11~2006年1月)

庶務幹事 黒沢高秀

- ・株式会社大空社による植物分類, 地理誌47巻2号掲載論文(高橋英樹「千島列島の植物地理資料」)の「アジア学叢書」第144巻(予定)『千島列島植物図鑑』(北部軍管区司令部, 昭和20年発行)への転載を会長名で許可した(11月21日)。
- ・植物分類地理学会と(旧)日本植物分類学会の統合に伴う植物分類地理学会の特許庁学術団体指定取消申請書を日本植物分類学会会長名で特許庁長官宛に送付した(11月21日)。特許庁長官より平成13年5月12日付で取り消しとなったとの書類が届いた(1月24日)。
- ・Edmond De Langhe氏によるAPG誌55巻2号掲載論文の図版(Hückinen, M. “*Musa voonii*, a new *Musa* species from northern Borneo and discussion of the section *Callimusa* in Borneo”, Fig. 4 (p. 84))の論文への転載を会長名で許可した(1月6日)。
- ・財団法人国際科学技術財団からの日本国際賞受賞候補者の推薦有資格者の紹介依頼に対し, 会長, 評議員(辞退者を除く), 編集長を推薦した(1月20日)。

商業目的の転載許可願への対応手続きについて(訂正)

庶務幹事 黒沢高秀

ニュースレターNo. 19(2005年11月号)で「商業目的の掲載内容の転載許可は学術著作権協会またはCopyright Clearance Center, Inc. に申請することになっている」とお知らせしましたが, 学術著作権協会に委託しているのは複写に関わる許諾のみで, 転載許諾は委託していませんでした。書籍への再録や図の転載など商業目的で『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』(植物分類地理学会時代の一部の論文を除く)および『分類』の掲載内容の転載を希望する場合も, 商

業目的でない転載許可申請と同様, 著者(共著論文に関しては第1著者またはcorresponding author)の許可を得た上で, 「転載許可願」を庶務幹事宛にお送りください。「転載許可願」は, 掲載物名, 掲載時期, 掲載場所(アドレス), 掲載の目的, 著者から許可を得たことが明記された任意の書式で, 書類上の宛名は学会長宛としてください。会長, 担当評議員, 編集委員長, 庶務幹事は提出された「転載許可願」にもとづき転載許可を与えるかどうか判断し, 会長名で許可の書類を発送します。

日本植物分類学会講演会の報告

田村 実(大阪市立大学)

現在の日本植物分類学会の設立後5回目の講演会が平成18年1月14日(土)に大阪市立大学文化交流センターで開催された。今回は、特にテーマを絞らずに、一日で植物分類学に関するいろいろな分野の話聞けるようにと思い、各演者に講演をお願いした。今回お話し頂いた演者と演題は次の通りである。

藤井伸二(人間環境大学):絶滅危惧植物の落とし穴:水田と草地の植物を例に

工藤 洋(神戸大学):タネツケバナの謎に迫る

西田佐知子(名古屋大学):未知の葉上器官「ダニ室」

加藤雅啓(国立科学博物館):カワゴケソウ科の分類と進化

邑田 仁(東京大学):ミャンマーの植物をたずねて(スライド講演)



今回の講演会では、質疑応答がとても活発に行われたと思う。興味深い話題を御提供下さった5人の演者の方々に感謝致します。

植物分類学会講演会に参加して

山下 純(大阪市立大学)

日本植物分類学会平成17年度講演会では、5名の演者がお話し下さり、それぞれに特色ある講演内容でした。その感想など。

人間環境大学の藤井伸二先生の講演では、水田と里草地を中心とした絶滅危惧植物について話されました。私は受付のために聞けなかったのが残念ですが、攪乱環境に生きる植物の保全は、今後の自然保護の新しいあり方が求められる問題だと思います。神戸大学の工藤洋先生のタネツケバナ属に関する講演では、表現形可塑性をもたらす遺伝子発現の制御機構への研究展開が期待され、また新環境への素早い適応と種分化に、交雑を起源とする網状進化が関わったことがうかがえました。名古屋大学博物館の西田佐知子先生は、葉に生じるダニ室の研究を紹介され、微細なダニの神秘的な世界が垣間見えました。以前、中国産 *Lonicera* の脈腋にできたポケット型「ダニ室」に感心したことを思い出します。少々名前が先行しているダニ室ですが、その機能と進化が近い将来明らかになるのが楽し

みです。当学会の会員にはお馴染みのカワゴケソウ科ですが、国立科学博物館の加藤雅啓先生には植物学の常識を破るカワゴケソウ科のボディープランの多様性について話していただきました。根から突起状の「葉」が多数出るものや、細胞崩壊によって葉が分裂して新たな「葉」を作るものなど、まことに奇態ですが、改めてカワゴケソウ科の「葉」について考えさせられました。東京大学の邑田仁先生には、標本密度が世界で最も低い地域としてミャンマーの植物を、奥地調査の楽しさとともに、美しいスライドで紹介いただきました。植物分類・地理研究における標本の重要性があらためて実感できました。ミャンマーの山村では森林に火入れをする、との話に、私としては、トラに脅かされていたであろう昔の暮らしに思いを馳せました。

その後行われた懇親会では研究のみならずいろいろな話題に花が咲き、最後にこの伝統ある講演会の存続と発展を参加者一同誓いあいながら、盛会裡に終わりました。

講演会の感想

布施静香(兵庫県立人と自然の博物館)

今回の講演会は、いつにもまして普段の大会では味わえない魅力があった。参加された方はお分かりになると思うが、これほど多彩なデーマをたった1日でじっくり聞く事のできる機会はそうないと思う。

工藤先生は、まず200種以上あるというタネツケバナ属植物について美しい写真で紹介され、分子遺伝学的レベルからも表現型可塑性の研究に取り組んでおられることや、異質倍数化と新たな生育地の獲得によるタネツケバナの多様化についてお話くださった。西田先生は、ダニとダニ室を作る植物等について具体的に解説され、ま

だまだ未知の器官であることやその魅力について熱く語ってくださった。ダニ室は植物の多くの分類群にまたがって見られる一方、ダニ室が見つからない植物グループがあるということなので、今後の植物採集時には、私を含め多くの方々がついダニ室を探してしまうことだろう。最後に邑田先生は、ミャンマーの植物の面白さと調査の困難さ、これからの研究の発展性を楽しく語ってくださった。どの講演でも活発な意見交換が行われ、大変充実した1日だった。学生さんの参加が殆どなかったのが少し残念だったが、知的好奇心を刺激される良い会だった。

環境省レッドデータブック・植物 I (維管束植物) の見直し調査の進行状況と中間報告

藤田 卓(第二次レッドリスト見直し調査とりまとめ担当, 九州大学)

日本植物分類学会は、環境省の委託を受け、2000年に発行された環境省レッドデータブック(『日本の絶滅のおそれのある野生生物』・植物 I (維管束植物) の見直し調査を行っています。本調査は、1788分類群の絶滅危惧種及びその候補種について、現地調査または文献調査を行い、2万5千分の1の地形図ごとに、株数、減少率を集計し、このデータに基づきコンピュータシミュレーションを用いた将来予測を行ない、2006年度末までにレッドリストの改定、公表を行う予定です。本稿では、この調査の進行状況および本調査で得られた暫定的な結果をご報告したいと思います*。

現地調査は、各都道府県の植物相に精通した約500名の調査員の方々の協力を得て、2003年～2004年の2年間行いました。現在、39都道府県から届いた調査票の入力作業を終え、データの集計作業を行っています。集計の結果、約1250分類群、約22000件のデータが含まれていることがわかり、これらのデータから

最近10年間の絶滅危惧種の現状と絶滅危惧種をとりまく環境の変化について、以下のような傾向が見えてきました。

絶滅の危険性が最も高いランクに位置づけられているCR種(IA類)全体の10年間の個体群の推移を見ると、減少したというよりは、現状維持もしくは増加している傾向がうかがえました。一方、CR種よりも絶滅の危険性が低いランクのEN種(II類)VU種(II類)全体では、現状維持が多いものの、全体を見ると増加というよりも減少している傾向がありました。さらに、EN種VU種については、この10年間で個体群の絶滅が確認された地点(2万5千分の1地形図)が、全体の6%(471地点)に達していました。すなわち、最近10年間でEN種VU種の現状は以前より厳しくなっていると言えます。絶滅の危険性が高い種の方が、減少率が低いというのは、一見矛盾するような結果にも見えますが、以下の2つの理由が考えられます。一つめは、CR種の多くは株数が少ない

ものの、人為の及びにくい山頂部や島嶼部に分布している種であるため、減少率が低い可能性があります。二つめは、CR種と指定された種は絶滅の危険性が高い種と人々に認識され、手厚い保全策がとられているため、減少率が低いことが考えられます。

また、10年間の株数の変化は、種毎に大きく異なっていました。キキョウ、タコノアシ、エビネ、ウチョウランなどのように、個体数の減少が著しい種がある一方で、ヤシャビシヤク、ハナガガシ、キノクニスゲ、フクジュソウなどのように個体数の変化がほとんど認められない種もありました。このような違いが生じる要因として、各種の生育環境(藤井1999)、生活史の違いなどが考えられますが、はっきりとしたことはわかっていません。このような違いが生じる要因を探ることは、日本全国の絶滅危惧種がおかれている現状の理解と今後取り組むべき保全策を考える上で重要な示唆を与えるものであり、今後の重要な検討課題の1つです。

減少原因を、今回の調査(最近10年間

の減少原因)と前回の調査(過去20～10年前の減少原因)をCR種で比較すると、自然遷移、踏みつけ、水質汚濁が顕著に増加する一方、産地極限、森林伐採、草地開発が減少していました。このように、この10年間で絶滅危惧種(CR種)をとりまく環境は変化していることがわかってきました。

紹介した今回調査のデータは入力終了したものだけでまとめた暫定的な結果です。残りのデータを加えた場合には、多少結果の変更があると思います。今後はコンピュータシミュレーションを用いたリスク評価を行い、2006年度末までに維管束植物レッドリストを改訂する予定です。

*本調査の詳しい報告は、日本植物分類学会の公式HPに掲載予定のRDBニュースレターvol. 3を参照いただければ幸いです。

引用文献

藤井伸二. 1999. 絶滅危惧植物の生育環境に関する考察. 保全生態学研究 4: 57-69.

大丈夫ですか？未納会費！

先月のニュースレター(No. 19)のお知らせにありましたように、

2001年度から長期滞納されている方で

2月末日までに納入がない場合、

3月大会時の評議員会の議決を経て

除名

となります。

お心当たりの方は早急に、
会計幹事までご連絡を！



お知らせ

日本植物分類学会第5回大会公開シンポジウムのお知らせ

日本植物分類学会第5回大会準備委員会

公開シンポジウムを以下のように開催いたします。参加費は無料です。奮ってご参加ください。

日 時: 2006年3月19日(日)

会 場: 琉球大学大学会館3階(特別会議室)

テーマ: 琉球列島の生物地理学研究-最近の話題と今後の展開-

(琉球大学21世紀COEプログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析」共催)

【15:00~15:30】「琉球列島の植物相の概要」横田昌嗣(琉球大・理・海洋自然)

【15:30~16:00】「琉球列島の歴史生物地理-動物学の視点から-」

太田英利(琉球大・熱生研・西原)

【16:00~16:30】「南西諸島におけるハマボスの染色体多型と地理分布」

荻沼一男(高知女子大・生活科学・環境理学)

【16:30~17:00】「琉球列島におけるニガナ属の網状進化」

傳田哲郎(琉球大・理・海洋自然)

【17:00~17:30】「琉球列島に生育する複数の植物種の遺伝的分化の

地理的パターンの比較」

瀬尾明弘(京都大・院・理・植物)

【17:30~18:00】総合討論

2006年度総会における審議事項

庶務幹事 黒沢高秀

3月18日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いいたします。

- (1) 2005 年度事業報告案(14ページ参照)
- (2) 2005 年度決算報告案(15ページ参照)
- (3) 2006 年度事業計画案(16ページ参照)
- (4) 2006 年度予算案(17ページ参照)
- (5) 奨励賞、論文賞および大会発表賞の新設について
- (6) その他

・植物RDB見直し調査の進捗状況について

評議員会の開催

庶務幹事 黒沢 高秀

日本植物分類学会第5回大会(於:琉球大学)の開催に合わせ、下記の通り2006年度第1回評議員会を開催します。評議員、幹事会、関係各位の出席をお願いいたします。

日 時: 3月17日(金) 16:00~19:00

会 場: 八汐荘小ホール 〒900-0014沖縄県那覇市松尾1-1-6, TEL 098-867-1191

(詳細は関係各位におって連絡します)

評議員会においては、総会における審議事項と同様の内容が審議されます。審議事項についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝え下さい。

2005年度事業報告(案)

(1) 集会等の開催

- ・2005年度講演会を大阪市立大学文化交流センターで開催(2006年1月14日)(ニュースレターNo. 19で予告)。
- ・年次学術集会(日本植物分類学会第4回大会)を高知県立牧野植物園で開催した(3月11 - 13日)(ニュースレターNo. 17で報告)。
- ・2005年度野外研修会を岐阜県で開催した(8月23 - 25日)(10ページ参照)。
- ・評議員会を2回, メール評議員会を1回開催し, 定例の議題の他に, 分類学会賞について, 会費滞納者の除名について, 等に関する審議を行った(ニュースレターNo. 17および 19で報告)。

(2) 出版物の刊行

・学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第56巻1-2号(計2冊)を発行した(3号は編集中)。

和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第5巻 1-3号(計3冊)を発行した。

- ・ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』16-19号(計4冊)を発行した。
- ・『植物分類学関連学会連絡会合同名簿』を発行した(4月)。

(3) 委員会活動

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・学会賞等検討委員会(3月7日に答申提出後解散)

(4) 日本植物分類学会賞

- ・第4回日本植物分類学会賞の授与をおこなった。
- ・第5回日本植物分類学会賞の選考をおこなった(2ページ参照)。
- ・奨励賞, 論文賞, 大会発表賞を新設することを評議員会で決定した(ニュースレターNo. 19で報告)。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等への参加・連携をおこなった: 日本学術会議, 植物分類学関連学会連絡会, 自然史学会連合, 日本分類学会連合。

(6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等を販売した(15ページ参照)。
- ・植物分類学関連情報(学術集会, 研究動向, 出版物, 公募)を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・植物分類学マニュアルの編集(継続)。
- ・未納会費の回収に取り組んだ。

2005年度決算報告(案) (2006.1.4 現在)

収入の部		単価	員数	2005年度予算	2005年度決算	予算との差異	
会費							
一般会員		5000	800	4000000	6075900	△ 2075900	注1
学生会員		3000	90	270000	378000	△ 108000	注1
団体会員		8000	30	240000	232000	8000	
別刷り (APG)		120000	3	360000	727770	△ 367770	注2
別刷り (和文誌)		75000	2	150000	152020	△ 2020	
バックナンバー販売				100000	338710	△ 238710	
利息				20	272028	△ 272008	注3
雑収入				50000	429856	△ 379856	注4
						0	
小計				5170020	8606284	△ 3436264	
繰越金				4510619	4510619	0	
合計				9680639	13116903	△ 3436264	
支出の部							
大会補助費				100000	0	100000	
講演会補助費				30000	30000	0	
出版物印刷費							
	APG (56(1)-56(3))印刷費	700000	3	2100000	2192925	△ 92925	
	APG別刷り・カラー印刷費	80000	3	240000	388017	△ 148017	
	和文誌印刷費 (5(1), 5(2))	500000	2	1000000	1094385	△ 94385	注5
	和文誌別刷り代 (5(1))	50000	2	100000	85008	14992	注6
	NL印刷費	80000	4	320000	332561	△ 12561	
英文校閲費				120000	118740	1260	注7
出版物送料						0	
	APG送料	110	3000	330000	348025	△ 18025	
	和文誌送料	145	2000	290000	250710	39290	
	NL送料	110	2000	220000	209145	10855	注8
会議費				130000	17400	112600	
学会賞賛金・表彰経費		30000	2	60000	60000	0	
自然史学会連合負担金				20000	20000	0	
分類学会連合分担金				0	0	0	
植物分類学関連学会連絡会合同名簿				160000	212220	△ 52220	
事務費						0	
	消耗品費			50000	48867	1133	
	アルバイト賃金 (発送代行料を含む)			180000	230114	△ 50114	
	封筒等印刷費			300000	277515	22485	
	通信費 (小包送料等を含む)			200000	267768	△ 67768	
	手数料・その他			20000	17721	2279	
	自動振替集金代行基本料			3150	3150	0	
	自動振替口座確認手数料	111	100	11100	20034	△ 8934	注9
予備費				200000	15360	184640	注10
小計				6184250	6239665	△ 55415	
次年度への繰越				3496389	6877238	△ 3380849	
合計				9680639	13116903	△ 3436264	

注1: 未納会費の納入が多かったため

注2: 別刷印刷費と別刷代金の差額は2004年度以前掲載分の今年度支払いも含まれるため

注3: 定額貯金満期に伴う税引き後の利子272000円を含む

注4: I A P T国際シンポジウム寄付金16.5万、高知大会の余剰金約10.6万、絵はがき販売約6.2万、著作権料約6.2万など

注5: 無料分別刷印刷費を含む

注6: 和文誌5(2)は印刷業者が別刷り代金を請求

注7: 手数料2000円を含む

注8: NL(1)は分類5(1)と、NL(3)はAPG56(2)と同時発送。それぞれ和文誌送料、APG送料として計上

注9: 消費税を含む

注10: 退会者からの誤引落金の返却(手数料込み)

特別会計 2005年度決算(案) (2006.1.4現在)

収入		2005年度予算	2005年度決算	予算との差異
前年度繰越金		2013027	2013027	0
利息		0	0	0
合計		2013027	2013027	0
支出				
次年度への繰越金		2013027	2013027	0
合計		2013027	2013027	0

2006年度事業計画(案)

(1) 集会等の開催

- ・2006年度講演会を開催する。
- ・年次学術集会(日本植物分類学会第5回大会:琉球大学(3月18~20日))を開催する。
- ・2006年度野外研修会を開催する。

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第57巻1-3号(計3冊)を発行する。
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第6巻 1-2号(計2冊)を発行する。
- ・ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』20-23号(計4冊)を発行する。

(3) 委員会活動

- 以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会: 矢原徹一(委員長), 勝山輝男(副委員長), 川窪伸光, 高橋英樹, 横田昌嗣, 角野康郎, 芹沢俊介, 加藤辰己, 藤井伸二, 米倉浩司, 小川 誠, 高宮正之
 - ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会: 柏谷博之(委員長, 地衣類), 中西 稔, 井上正鉄(以上地衣類), 岩月善之助, 神田啓史, 古木達郎, 長谷川二郎(以上蘚苔類), 服部力, 吹春俊光, 出川洋介, 土居祥兌(以上菌類), 千原光雄, 渡辺 信(藻類)
 - ・植物データベース専門委員会: 伊藤元己(委員長), 梶田 忠, 高橋英樹, 永益英敏, 三島美佐子, 山口富美夫
 - ・学会賞選考委員会: 加藤雅啓(委員長), 高橋英樹, 出口博則, 永益英敏, 西田佐知子, 村上哲明
 - ・命名規約邦訳委員会

(4) 表彰

- ・日本植物分類学会奨励賞, 論文賞, 大会発表賞を新設する。
- ・第5回(2006年度)日本植物分類学会賞の授与, 第6回(2007年度)日本植物分類学会賞・2007年度奨励賞の選考をおこなう。
- ・2006年論文賞の選考を行う。
- ・日本植物分類学会第5回大会発表賞の選考および授与を行う

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等への参加・連携をおこなう: 日本学術会議, 植物分類学関連学会連絡会, 自然史学会連合, 日本分類学会連合など。

(6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売を行う。
- ・植物分類学関連情報(学術集会, 研究動向, 出版物, 公募)を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換をする。
- ・植物分類学マニュアルの編集を継続する。

2006年度予算(案)

収入の部	単価	員数	2006年度予算	前年度予算との差異
会費				
一般会員	5000	800	4000000	0
学生会員	3000	90	270000	0
団体会員	8000	30	240000	0
バックナンバー販売			100000	0
利息			20	0
雑収入			50000	0
小計			4660020	△ 510000
繰越金			6877238	2366619
合計			11537258	1856619

支出の部					
大会補助費			100000		△ 100000
講演会補助費			30000		0
出版物印刷費					注1
	APG (57(1) -57(3)) 印刷費	700000	3	2100000	0
	APGカラー印刷費	20000	3	60000	180000
	和文誌印刷費 (6(1), 6(2))	500000	2	1000000	0
	NL印刷費	80000	4	320000	0
英文校閲費				120000	△ 120000
出版物送料					
	APG送料	110	3000	330000	0 注2
	和文誌送料	145	2000	290000	0
	NL送料	110	2000	220000	0
会議費			330000		△ 270000 注3
学会賞賞金・表彰経費	30000	2	60000		△ 40000
自然史学会連合負担金			20000		0
分類学会連合分担金			10000		150000
事務費					
	消耗品費			50000	△ 50000
	アルバイト賃金 (発送代行料を含む)			180000	△ 130000
	封筒等印刷費			300000	△ 120000
	通信費 (小包手数料を含む)			250000	50000
	手数料・その他			20000	0 注4
	自動振替集金代行基本料			3150	0
	自動振替口座確認手数料	111	100	11100	0
予備費				200000	0
小計			6004250		180000
次年度への繰越			5533008		2036619
合計			11537258		1856619

注1：別刷請求を業者が行うため別刷り収入及び別刷り代金は計上しない

注2：和文誌とNL2回を同時発送する場合の送料見積もり。

注3：国際植物命名規約邦訳出版会議20万円を含む

注4：消費税を含む

特別会計 2006年度予算案

収入	2006年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2013027	0
利息	0	0
合計	2013027	0
支出		
次年度への繰越金	2013027	0
合計	2013027	0

<参考資料>

会員数(人) (2006.1.16現在)

	男性	女性	計
国内一般会員	719	90	809
学生会員	66	30	96
海外個人会員	11	1	12
名誉会員	9	2	11
計	805	123	928

金沢大学理学部標本庫 (KANA) 再開のお知らせ

植田邦彦(金沢大学)

金沢大学植物標本庫は、昨年(2005)の10月にようやく引っ越しが終了しました。この間、標本庫を閉鎖せざるを得ず、皆様には大変ご不便をおかけいたしました。多数の標本閲覧の要請をいただいていたのですが、物理的に不可能なため、すべてお断りし、心苦しい状態が続いておりましたが、ようやく再開のめどがつかしましたので、ここにお知らせ致します。

ただし、慚愧に耐えないことに以前よりも更に狭くなってしまいました。このため、当面は種子植物のみを一般公開し、それ以外については置き場所が整備出来るまでは閉鎖出来ないため、非公開とさせていただきます。また、タイプ標本については一般公開標本箱から抽出し、別個に保管することに致しました。

現在、鋭意引っ越しの後かたづけを進めており、4月以降は一般公開可能と思われるので、メールにて閲覧希望のご相談をお願い申し上げます。

金沢大学植物自然史標本庫責任者
植田邦彦(kueda@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)

教員(助教授または講師)の公募

植田邦彦(金沢大学)

私どもの研究室、すなわち金沢大学大学院自然科学研究科生命科学専攻(博士後期課程)生物多様性動態学講座植物多様性分野=同生物科学専攻(博士前期課程)自然史講座植物自然史分野の助教授または講師を下記の通り公募致します。

- 採用人員 助教授または講師 1名 (40才以下の方が望ましい)
- 公募分野 植物系統分類学(陸上植物を研究対象とし、幅広い関心を持つ方。)
- 着任予定 2006年8月1日
- 提出書類
- ・履歴書(受賞歴・学会での活動等、学外での活動も含む。)
 - ・業績リスト(査読雑誌に掲載された原著論文、その他の雑誌に掲載された原著論文、総説・解説、及び著書等にわかりやすく区分すること。)
 - ・上記業績の別刷各1部(コピーでも可)
 - ・国際会議等の招待講演等の発表状況、また、シンポジウム等のオーガナイズや学会組織委員等の経歴等
 - ・外部資金導入状況を示すリスト
 - ・従来の研究内容と今後の研究・教育への抱負について、それぞれ2000字程度で書いたもの
 - ・研究内容等を問い合わせることが出来る方2名の所属、氏名、連絡先、応募者との関係を記した書面(推薦書は不要です。)
- 応募締切 2006年3月15日必着
- 書類送付先 〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学理学部生物学科長 桜井 勝
(「教員応募関係書類」と朱書きの上、書留で送付のこと)
- 問い合わせ先 〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学大学院自然科学研究科 植田邦彦
電話076-264-6209 メールアドレス kueda@kenroku.kanazawa-u.ac.jp
ホームページ <http://magnolia.s.kanazawa-u.ac.jp>

着任後は大学院自然科学研究科生命科学専攻の一員として教育研究に携わっていただくとともに、博士後期課程生命科学専攻(<http://www.nst.kanazawa-u.ac.jp/katei/k06.html>), 博士前期課程生物科学専攻(<http://bio.s.kanazawa-u.ac.jp/biosci.html>)並びに理学部生物学科(<http://biology.s.kanazawa-u.ac.jp>)の教育(講義・実験・野外学生実習), 及び、全学共通(教養)科目を担当していただきます。また植物標本庫の維持管理に積極的に関与していただきます。

なお、生命科学専攻植物多様性学分野/生物科学専攻植物自然史分野では、植田邦彦教授、木下栄一郎助教授、小藤累美子助手が教育研究を行っています。本学自然計測センター附属植物園には圃場、温室および水草プール等が整備されています。

科学博物館植物研究部研究官の公募

加藤雅啓(科学博物館)

- 採 用 人 員 1名
 研 究 分 野 植物分類学
 職 務 内 容 植物あるいは菌類に関する調査研究(分子系統解析の心得のある方)、
 標本の収集及び管理、成果の公表と教育普及活動
 勤 務 地 独立行政法人国立科学博物館植物研究部(茨城県つくば市)
 応 募 資 格 博士の学位を有し(平成17年度内に取得見込みの者含む)、平成18
 年4月1日で40歳未満の者
 採用予定時期 平成18年4月以降の可能な限り早い時期
 提 出 書 類 (1)履歴書(写真貼付)1部
 (2)研究業績目録 1部
 (3)主要論文3部の別刷り、またはコピー 各1部
 (4)現在までの研究概要 A4紙1枚
 (5)今後の研究の抱負 A4紙1枚
 (6)博物館活動、特に展示及び教育普及活動に関する抱負 A4紙1枚
 (7)推薦書(または応募者について照会できる方の氏名、連絡先)1枚
 (8)研究費などの取得状況 1部

* 当館では、個人情報保護の観点から、応募書類は次のとおり取扱いますので、予めご了承ください。

- 1) 提出書類は選考以外の目的には使用しません。
- 2) 提出書類は、選考後適正に処理します。なお、書類の返却を希望する場合は返却先を記した封筒を同封してください。

応 募 期 間 平成18年2月28日必着
 封筒の表に「研究官応募書類」と朱書きし、書留で郵送すること。

応募書類提出先および問い合わせ先

〒305-0005

茨城県つくば市天久保4-1-1

独立行政法人国立科学博物館植物研究部 植物研究部

研究職員選考小委員会 加藤雅啓

TEL 029-853-8970 FAX 029-853-8401

本の紹介

書評:「中尾佐助著作集 第V巻 分類の発想」

中尾佐助著, 北海道大学出版会, 2005年, 800ページ, 定価12, 600円(税込み)

植物分類学に身を置くものにとって分類とは決まりきったことであると思っていて、それについて自問することはあまりない。それが突然、分類とはなんですか?と真正面から訊かれるとどぎまぎして返答に困ることがある。それでも、日頃やっていることから分類とは〇〇ということですよと答える。しかし、本著でいう分類はもっとはるかに広い意味で使われている。本著は中尾佐助著作集の1つで、「分類の発想」と題されている。

中尾佐助氏は、植物学の世界では知らない人はいないくらい有名で、本著作集全6巻「農耕の起源と栽培植物」「料理の起源と食文化」「探検博物学」「景観と花文化」「照葉樹林文化論」の題名が表すように、農耕文化起源論や照葉樹林文化論を展開したあの研究者である。これらの仮説提唱と切っても切れないのがフィールド調査であり、それについても随所に語られている。ヒトと植物のかかわりが著者の一貫した研究テーマであった。

さて、私にとって分類とは、生命が起源してから連綿と続いてきた進化と多様化の結果今に生きる生物が示す多様性とその歴史的背景を探り表現することである。本著で著者が主張する分類とはそのような生物学的な分類にとどまらず、ヒトが生きるために習得した自然な行為である識別なども含まれる広いものである。現代文明に接する前の民族が野生生物を生物資源として利用する上でそれらを分類する民族植物学(生物学)的な認識はよく知られた例である。一般の動植物の同種個体の分別さえも分類のカテゴリーに入れて語られている。

本著から分類について基礎生物学的な意味で新しいことを得るということは本の性格上ないかもしれない。むしろ、日常の中から生まれた分類あるいは分別するという行為と認識がさまざまな場面で登場するような「普遍的」なものであり、系統分類(系譜分類)はその一つの狭い領域にすぎない(日常



的な分類から系統進化・多様性を表す分類への変遷について知りたい場合は他の文献を見るとよい)。本著は独特の中尾佐助博物学の一つとして、分類について語っているのである。題名の「分類の発想」はだれでも、どこでも、どんな生物でも(植物さえも)分類が可能であり実践していることを示す点で内容を的確に表現している。本著は「分類の発想」「分類の論理」「文化と分類」「植物と分類」「フィールドと分類」「分類の道具でみた論文と本」の6部からなり、解説「中尾さんの「分類」観」(岩槻邦男)がついている。

本著はこのような形で出版されるとは意図せずに書かれた著作を集めたものである(第VI巻, 巻末参照)。そのため内容は多岐に及んでいるが、むしろそのことで、「分類する」ということをめぐって中尾佐助の人と考えがはつきり浮かび上がっている。本著を読んで他の巻も見たい、あるいは他巻の続きで本著を読む読者が少なからずいるであろうが、そうなれば本著作集シリーズの企画は成功したといえる。ところで、著者が日本植物分類学会の会員であったかどうか定かでないが、著者のような視点から学会で発表や発言すれば、討論の内容もより豊かになるに違いない。

加藤雅啓(国立科学博物館植物研究部)

「被子植物の起源と初期進化」

高橋 正道著, 北海道大学出版会, 2006年2月, A5, 500ページ, ハードカバー, 8500円+税

おかげさまで, 科研費「研究成果公開促進費」の支援をうけ, 拙書「被子植物の起源と初期進化」が, この2月25日に出版されることになりました。植物分類学会会員の皆様には, 著者割制度が適応されますので, どうぞよろしく願いいたします。 高橋 正道(新潟大学)

〈目次〉

- 序論
- 第1章 陸上植物の出現
- 第2章 森林の成立と裸子植物の出現
- 第3章 裸子植物の台頭
- 第4章 白亜紀の被子植物の出現と多様化
- 第5章 被子植物の最古の小型化石
- 第6章 被子植物の主要始原群の分化
- 第7章 初期進化段階の被子植物
- 第8章 白亜紀の被子植物の台頭
- 第9章 日本から発見された白亜紀の被子植物
- 第10章 後期白亜紀に多様化した被子植物
- 第11章 新生代の被子植物
- 終論
- 補論1 種子植物の化石資料
- 補論2 被子植物の新分類体系
- 資料1 地質年代表
- 資料2 白亜紀の小型化石の産出場所と年代
- 索引



「被子植物の起源と初期進化」という研究テーマは, これまで「Abominable mystery=忌まわしき謎」とされ, 進化論で有名なダーウィンでさえ敬遠してきた。その主な理由は, 植物化石のデータが少なく, 被子植物の「失われた鎖」を見つけることは容易ではなかったことによるものである。

しかし最近, この難問に対して非常に興味深い解決の糸口が見出され, 研究は新しい展開を見せている。その1つは, 分子遺伝学的手法による研究成果である。

もう1つの糸口は, 植物化石の研究である。従来, 植物化石といえば, 硬い岩石の層で発見される葉の化石が主なものであった。しかし1981年, ロンドン大学のFriis博士とSkarby博士は, スウェーデン南部の後期白亜紀の地層から, 被子植物の花の

化石を立体的な構造が保存されたままの状態で見出したのである(Friis & Skarby 1981, Nature 291: 485-486)。彼女らの3ページにも満たない論文は, 世界を驚愕させた。その後, 白亜紀の地層から3次元的構造が良好に保存されている被子植物の花, 果実や種子などの小型化石が次々と発見され, 被子植物始原群の解明に画期的な貢献を果たしつつある。まさに, 白亜紀に生育していた被子植物の「失われた鎖」がよみがえろうとしているのである。

本書では, 陸上植物の進化の歴史をふまえて, 被子植物の起源と初期進化について, 私のものを含めた最新の研究成果をもとに, 花粉や植物化石という視点から解き明かされつつある白亜紀における被子植物始原群の進化の過程を紹介している。

.....
※税込価格8,925円のところを, 著者紹介価格の, 送料込み7,450円[2割引(著者割引)+送料実費]にて販売させていただきます。この機会にぜひご注文いただければと願っております。お申し込みは北海道大学出版会・成田宛(Email: hupress_2@hup.gr.jp), 高橋先生紹介と明記のうえご注文下さい。なお5冊以上まとめて同一箇所への送付の場合は, 送料をサービスさせていただきます。 成田 和男(北大出版)

いきもの便り

コケの孢子体・その1・

坪田 博美(広島大学)

コケ植物では一般的によく目にする緑色の植物体が配偶体で、これがシダ植物の前葉体にあたります。その上に、造卵器や造精子などの有性生殖器官ができ、造卵器の中の卵細胞が受精して発達し、最終的に孢子を作る孢子体になります。コケ植物の孢子体は、葉などの側生器官をもたず外見上単純な形をし、栄養的に配偶体に依存した状態にあり、この点が他の陸上植物と大きく異なります。

孢子体は、蒴(さく)とそれを支える蒴柄(さくへい)、配偶体から栄養を受け取る足からなります。蒴は単純に言えばコケ植物の孢子が作られる袋ですが、正確には孢子嚢を取り囲む組織全体を含めた言葉です。蒴の中の組織が分裂して細胞の数が増え、孢子を作る組織が生まれ、それらが減数分裂して孢子になります。孢子体とくに蒴の構造や発達の様子は、グループによって異なります。コケ植物は、蘚類、苔類、ツノゴケ類の大きく3つの分類群に分けられますが、この根拠のひとつに孢子体の構造の違いがあげられます。

一般的な蘚類では、孢子体はゆっくりと成長して、蒴の成熟まで比較的時間を要します。成熟した蒴は蓋とつぼに分かれ、蓋が取れた後のつぼの口から孢子が散布されます。口の縁には蒴歯(さくし)とよばれる構造があり、孢子散布を調整しています。一般に乾燥すると蒴歯が開くのが普通ですが、反対に湿った場合に

開くものもあります。一方、教科書でよく蘚類の代表とされるスギゴケの仲間ですが、蒴歯が一般的な蘚類で見られる構造とは大きく異なっています。スギゴケの仲間では、つぼの口の部分は開放されず口膜とよばれる膜が残り、ちょうど太鼓の鼓面のような状態になります。口膜とつぼのつなぎ目にくしの歯状の蒴歯がならび、蒴歯と蒴歯の間に隙間があります。膜が動くとき蒴の内外に気圧差が生じて、蒴歯の隙間から孢子が放出されます。また、ミズゴケ類やクロゴケ類、ナンジャモンジャゴケ類などは、孢子体の寿命が短かったり、蒴が縦またはななめに裂開するなど、孢子体が苔類で見られる性質をもつという点で大きく異なります。このため、蘚類とは別の独立した分類群とする場合もあります。

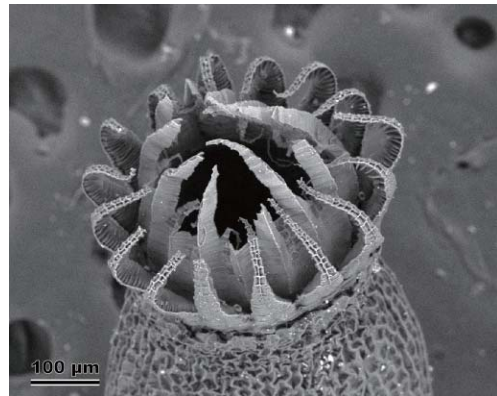


図. 蘚類の蒴歯の例。カガミゴケ *Brotherella henonii* (Duby) M. Fleisch. (ナガハシゴケ科 *Sematophyllaceae*) の蒴歯。蒴歯は外側と内側の2列に並び、それぞれ外蒴歯、内蒴歯とよばれる。写真は、広島大学デジタル自然史博物館 <http://www.digital-museum.hiroshima-u.ac.jp/~museum/> より。

2006年度の野外研修会は、八甲田か種子島で調整中です。

詳細は、次号ニュースレターでお知らせする予定です。

乞うご期待！

植物と動物便り・2・ 〜クスノキのダニ室〜

西田佐知子(名古屋大学)

学会大会や講演会を聞いた方には二番煎じで申し訳ありませんが、せっかくですので、私が研究しているクスノキのダニ室について紹介させていただきます。

ダニ室というのは、葉の脈と脈の間に見える、小さな部屋のような器官です(図1)。虫ごぶと違って植物が自前で作り作り、ダニがいることが多いため「ダニ室」とか「ダニ部屋」と呼ばれています。でも、何のために作っているのかは分かっていません。多くの研究者は、ダニ室を持つ植物が、ダニ室に肉食や菌食のダニを住まわせて、葉の掃除をしてもらっていると考えています。しかしクスノキのダニ室では、植物に寄生すると思われるダニがよく見つかるのです。不思議だ、実態はどうなっているんだろうという疑問から、クスノキのダニ室を調べ始めました。すると、なかなか奥の深い事実が見えてきたのです。

まず、クスノキには、1枚の葉に幾つものダニ室があることがわかりました。中には4つも5つもダニ室がある葉もあります。そして、葉のどの部分にダニ室ができるかによって、ダニ室の形(特に口の部分の広さ)が異なることもわかりました。それだけでなく、形の違うダニ

室には違うダニが見つかりました(いつも見つかるとは限りませんが)。三行脈の根元にある口の狭いダニ室(図1)の中には、植物を食べるとされるフシダニの仲間が多いときには40匹くらいおり、卵を生みつつ暮らしています(図2)。主脈沿いなどに見られる口のやや広いダニ室には、ナガヒシダニの仲間で赤く大きな肉食のダニが、こちらにも時には親子で見られます。一方、葉の縁に近い脈にできる一番口の広いダニ室では、カブリダニの仲間である肉食の大きなダニ(図3)が、卵を産んだり脱皮をしたりしているようです(成体は室内にはいません)。形の違うダニ室を、ダニたちは使い分けしている?

試しに、口の広いダニ室にフシダニがいる葉を探し出して持ち帰り、密封して中にカブリダニを放すと、フシダニは口広のダニ室からいなくなります。つまり、フシダニは肉食のダニを避けて、口の狭いダニ室を利用しているようなのです。クスノキが形の違うダニ室を用意しているからこそ、フシダニ・ナガヒシダニ・カブリダニなどが共存できているのです。

それにしても、なぜ植物は、害を及ぼすであろうフシダニにダニ室を提供しているのでしょうか?この謎には首をひねるしかありません。どうやらダニ室、一筋縄ではない器官のようです。かくして、クスノキの葉に目を凝らす日々は続きます。



図1. クスノキのダニ室(葉の裏側、三行脈根元にできる口の狭い型)。



図2. フシダニの一種。ダニ室中に群がる。



図3. カブリダニの一種。

入会申込,住所変更,退会届,会費納入,購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1
国立科学博物館筑波実験植物園

日本植物分類学会 田中法生(会計幹事)

Phone: 029-853-8433

Fax: 029-853-8998

E-mail: ntanaka@kahaku.go.jp

会費: 一般会員5,000 円,学生会員3,000 円,

団体会員8,000 円

郵便振替 00120-9-41247

名 義 日本植物分類学会

平成18(2006)年2月 15日印刷

平成18(2006)年2月20日発行

編集兼 福岡市東区箱崎6-10-1

発行人 九州大学総合研究博物館

三島美佐子

発行所 福島市金谷川1

福島大学共生システム理工学類内

日本植物分類学会